



# 武士道の極は愛なり

山波言太郎

初出『ホルテ・チノ日本の心』第4号2010年3月  
『日本の言霊が、地球を救う』所収

目次

- 序 「終戦」で吹いたのは神風だった
- 一、君知るや 「日本国憲法」「前文」に秘められた  
地球開闢の真義
- 二、人間とは何か、この至大の難問
- 三、幼年期・少年期・青年期、それからいよいよ壮年期
- 四、聖徳太子の夢実現したのに、日本はなぜ敗戦したのか
- 五、動物と神の子、いたい人間とはどちらか、  
ここが思案のしどころです
- 六、聖徳太子と源義経の「神軍兵法」
- 結語

## 序 「終戦」で吹いたのは神風だった

元寇（1274年の文永の役、1281年の弘安の役）は、二度とも神風（時ならぬ台風の襲来）による勝利だと言われます。ところが昭和二十年八月十五日、日本降伏の日にも、もう一度神風が吹いていました。それはマッカーサー憲法と呼ばれる「日本国憲法」の押し付けです。これはまさしく神風でしょう。なぜなら、一部の人が言うように戦勝国アメリカからの押し付けだったのでから。押付けでなくて、どうしてこんな絶対平和の憲法など、自分の手で作りましょうか、作れましょうか。だから神風です。神風の仕業です。……このおかげで、日本は以後六十余年もの平和を保ってきたのですから。……と人は言いたいでしょう。でも、これは全く間違った解釈です。

なぜか？ 六十余年の平和とは、アメリカ氏の隷属犬として飼われた動物としての身の安全にすぎなかつた。でも、やはり神風なのです。なぜか？ このおかげで日本が日本に目覚めます。全世界がこれからこの憲法のおかげで、恒久平和の歴史の時代に移れますから。但し、それには一つの大事な条件があります。その秘密が日本国憲法の「前文」の中に秘められております。

# 一、君知るや 「日本国憲法」「前文」に秘められた 地球開闢の真義

皆さま

日本国憲法の「前文」には次のように書かれています。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、………、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」と

右の前提条件あればこそ、有名な第九条が成り立ちます。

**第九条** 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

(注) 傍線は筆者が付す

即ち日本国の永久の、一つ、戦争の放棄と、二つ、陸海空軍その他の戦力の放棄の条項です。これ<sup>1</sup>で有史以来最初の平和国家「日本」が出現しました。でも、エヘンと日本が威張るためには、絶対二つの事が必要です。一つは「日米安全保障条約」を結んで、日本の空に核の傘を張りめぐらし

ておいて貰うこと。でも、これ百パーセント絶対ではありません。アメリカだつて国益のために知らんぷりをしたり、手抜きをすることが無いとはいえません。どうしますか。その時あわててはいけないために、平素から忠犬ハチ公みたいに準属国になつていればいいわけです。マア、奴隸犬、つまり動物ですね。これだつて絶対安全ではありません。犬ですからね、ポイと都合によつて見捨てられることがないとは言えません。これが平和国家「日本」の実状です。

ですから、動物犬になり下がりがりたくないなら、またどんな事があつても平和国家でありたいなら、もう一つの条件が絶対になつてきます。筆頭に前記した日本国憲法の「前文」です。もう一度記します。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、……、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」

これを空念仏にしないこと。他人頼み、空頼み、お天気まかせにしないこと。必ず日本国の手で右を実現させること。つまり全世界諸国民が「平和を愛する諸国民」になつて下さること。「公正と信義に信頼」できる人に全世界諸国民がなつて貰うこと。もしこの前提条件がなければ、日本国憲法なんてアブクです、仮空の空事そらごとのニセ憲法です。だから一部の人々が「マッカーサー憲法」「押し付け憲法」と言つて馬鹿にするのです。つまり、早く憲法改正せよとか、戦力を持つとか、核装備までせよとか言うのです。これらの人々は単なる戦争愛好者ではありません。愛国者です。ですけど、過去の一度犯した過ちの道に逆戻りすることです。どうしますか？

ここで決断が日本人に必要です。やはり日本国憲法の「前文」を成就させることです。つまり私達の手で、全世界諸国民を「平和を愛する諸国民」に変えること。「公正と信義に信頼」できる全人類に切り変わって貰うこと。これ以外に道はありません。

そんな馬鹿なことできるか、ユメみたいな事言うな。それなら、日本国憲法を改正して下さい。再軍備でも何でもして下さい。でないと日本はいつか必ず滅びます。それとも、永久にアメリカ氏か、どなた氏か、強い人の飼いだに甘んじますか。二者択一です。

再軍備か？ 飼いだか？ ……そのどちらも嫌なら、日本人の誇りのために、こちらで腹をくくって、腹を切る覚悟をして、日本国憲法の「前文」を成就させたいかがですか？ 私が八月十五日「敗戦の日」に、神風が吹いたと言ったのは、この事です。あの日、日本は焼土作戦、全員玉砕戦法も考えていました。昭和天皇の裁断で降伏しました。そのかわり天からマッカーサー憲法が落ちこちてきました。これが神風です。どうせ腹を切るなら世界のために腹を切りませんか。即ち日本国憲法「前文」の成就です。日本人が決断して、これから全世界の地球人を平和を愛する諸国民に変える、命がけの仕事にとりかかるといふことです。そんなユメのような事、成せば成るです。日本の独立と名誉のために、それがひいては世界のためです。これからその方法、いきさつ等についていろいろ書いてみます。

皆さま、その前に一言。ユネスコ憲章をご存知ですか、その「前文」にこう記されています。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と。これは地球人類を愛の人類に切り替えようという大仕事です。思い切ったことを記してあるもので

す。でも、まだ実現をみていません。私達日本人は、ユネスコに代って、それより一步早く、独自の力と方法でやり抜かねばなりません。ユネスコ待ちでアテにしていたら、いつの日かポカンと日本の独立が脅かされますから。

## 二、人間とは何か、この至大の難問

### 〈三つの問い〉

1、地球人がそっくり、その心が愛の人に変われれば、地球から戦争が無くなる。理窟は単純です。そんな事が出来るのですか。

2、人は戦争をするもの、これが常識です。人は戦争を通じて、その文明が発達してきた、これが歴史です。

3、人が愛の人になるとはどういうことですか。成れるのですか。日本人にそんな大それた（人類全体を愛の人に変えてしまうという）大仕事やられるのですか。

先ず、「人間とは何か」から考えてみましょう。

初めに、私は「日本人は犬になり下がっている」と言いました。人は犬になれるのですか。成れます。

犬より下にも成れます。狼とか、鬼まで成れます。今まさに（鬼さん文明花盛り）になりかかっています。それが、核戦争の危機とか、地球温暖化・地球環境破壊とか、もう一つまさにこれが鬼の仕業、人類の経済格差の酷さ<sup>ひど</sup>。六秒間に一人ずつ飢えて死ぬ（飢餓人口約十億人）。それなのに筆<sup>むし</sup>り取ることを放任している・競い合っている（自由主義）とか（民主主義）とか呼ぶ誇らしげな歪<sup>いびつ</sup>社会に平気で住んでいる。そうでしょう、たとえば世界の一年間のGDP（国内総生産）は約五〇〇〇兆円。世界人口は六七億人なら、一人あたり約七五万円になります。四人家族なら三〇〇万円。日本ではギリギリですが、外国でなら悠々生活ができます。これだったら飢える人は一人もいない筈。何かがおかしい。聞くところによると、世界の富の40パーセントは0・1パーセントの人が所有し、わずかに1パーセントの富に50パーセントの人口がしがみ付いているとか。これって鬼社会でしょう。だから人は鬼にまで成れるのです。

それなら、神さまには成れないのですか。もしなれるとすれば、それが絶対平和、ユネスコ憲章の言う恒久平和「人の心の中に平和のとりでが築かれた」暁の（戦争が消えた）夢の現実世界です。ユネスコ憲章「前文」が嘘を吐いていなければ、ユネスコは人は神さまに成れる、世界の人全部を神さまにしたい成れるからと、世界に率先して叫んでいるわけです。本当に人は神さまに成れるか？ 鬼になったり、神さまに成ったり、人間は器用に上にも下にも行けるものですか？ これが「人間とは何か」です。

私は、人を十段階に、上はピン（神さま）から人はキリ（鬼）にまで、登り降りするもの（つまり進化したり、墮落したりが出来るもの）、そう考えて『表』を作ってみました。これを示す前に、

先ず私達日本人が登ったり降りたりした過去の歴史を考えてみます。

### 三、幼年期・少年期・青年期、それからいよいよ壮年期

#### 1、日本の国産みをした聖徳太子

人に人格があるように、国には国柄があります。この国体がハッキリ意識自覚され（注、物心つき）、内外に明らかかな形で表出されたのは、聖徳太子によつてです。有名な隋の煬帝への国書「日出づるところの天子、日没するところの天子に書を致す、恙なきや」。これは日本の独立を外交の上で鮮明にし、邪馬台国とは異質の存在（中国の四囲の朝貢国に非ざる存在）を、内外に闡明せんめいした、大和政権の世界史への夜明けです。

日本は物真似・猿真似上手、外来文化の攝取で肥かどつた要領のいい国家に思われますが、これは見当違いです。内にある天分を外に發揮する幼年期・少年期に学習と体験が不可欠であるのと同じように、天分発現の歴史期間を見てそう評されるのです。

天分の目覚め自覚が聖徳太子の飛鳥時代で、大化の改新を経て、奈良朝でこの天分が国体として国史に記されます。この記す作業が『古事記』『日本書紀』の編纂でした。国体とは万世一系の天皇

がしろしめす国、その源に神話（天地の初発の三位一体の神と、陰陽二神イザナギ・イザナミが産んだ国々・神々・人・万物と、とりわけ三貴子の筆頭天照大神の本流であるニニギの靈統を代々伝える日本国の天皇たちという形で）、この神話に基づいて日本国の国体を形成させました。

ですから日本の国体とは何でしょうか。宇宙初発の、いわば創造主の生成の目的を完遂すること。ここで目的論的に宇宙がとらえられます、生成の目的ありと。ここが西欧文化の粹である自然科学と分岐れる点。東洋では、なかんずく日本の文化では、自然界は（宇宙は）生きもの、生命として受けとります。だから生成に目的あり。生きものだから。その目的とは自己貫徹。自己とは愛です。なぜなら、宇宙だけあって、私が無いのが無いように、私が在って、宇宙が無いこともありませぬ。これは私は宇宙ということですから。これが我れ在り。換言すると、意識とは生命であり愛です。

これ以上の愛がありますか。私がそっくり宇宙大にハマッてしまいました。一切万物衆生——何のことはない私です。何だか落とし噺に聞こえますが………宇宙は自己増殖をつづける生きものです。蒸す霊です、ムスヒは結びです。ですから自己完結します。それは愛の結実です。

ですから、日本の国体とは、そもそも宇宙の自己完結をつづける姿を、日本の歴史にうつしとらせるパーソナリティ（国柄）というほどの意味です。ですから日本の歴史は地球全体の愛の結実で終わります。ここでユネスコ憲章「前文」とピタリ一致します。また、日本国憲法「前文」の貫徹が、その役目（天命）となります。

という訳で、聖徳太子は次に（独立闡明の次に）、仏教をとりあげ国に定着させて、幼児日本国の背骨を作る仕事をなさいました。それだけでなしに、有名な「憲法十七条」と「冠位十二階」で、

日本国の君（天皇）と臣との分を明らかにして、臣の心構えを厳しく示し、その上に立つて日本国の進むべき大方向を「和」にあるぞと明示されました。この和とは君臣の和、人の和は勿論ですが、実は神と人の大和ということですから。これについては後で考えます。これは国体の完結と地球の愛の結実と深く関わってきます。

もう一つ、何としても中国の律令制度を取り入れて、天皇を中心にした日本国の律令体制を確立させねばなりません、中央集権化です。この仕事は後に委せるために、さつーと身をひかれました。

## 2、権力と権威、動物に無くて人間にあるこの二つのもの

人間というものは二つのものが無ければ生きていけない。一つは食、これは体を支えるもの。これは動物なら（生物なら）皆等しく無ければならないもの。しかしもう一つ、動物には必要がないが、人にだけは不可欠なもの、権威（ひろい意味で精神の糧<sup>かて</sup>）。

食は動物なら拾って得られるが、人間の場合は集団として組織的に、高度なより多量の食を得ようとするから、組織者つまり支配者が必要であり、ここに支配と被支配という形で権力が生まれる。だから、人間において、不可欠な二つは食を確保するための権力と、もう一つ、精神の糧のための権威。権力と権威。

この二つをめぐって人類の歴史は展開されていく。権力は食、動物性の不可欠物。権威は心・精神のため、人間ならではの不可欠物。人は単に動物ではない。もう一つ魂と呼ばれ、精神性を保持

する別種の生きもの。

従って、人類が辿り来し道筋には、権力（食）だけでなく、権威（心・精神）の二つの興亡、二つの結び付きや分離、その有り様<sup>あやう</sup>が伝えられている。このような意味での人間の歩み来し道筋、また、これから歩んで行く道筋、即ちこれが人類史である。この観点から、日本の歴史を眺めてみよう。

### 3、武家政権の時代に、日本の心が芽を吹き出した

一一八〇年に源頼朝が鎌倉に入る、一一九二年に征夷大將軍となる。これが日本における武家政権の始まりです。これは地震で言えば中地震。聖徳太子が夢みた天皇主権（神の皇統者である権威と、政治による現実社会支配の権力と、二つながら握る）、その半歩前進です。なぜなら、大地揺らいで、人はその動物性（人は食で生きるもの）と、神聖性（精神で生きるもの）との、二つのうち前者・動物性の牙を先ず表に出して、経済力と武力つまり「権力」で人類支配が出来る、その貴重な体験の歴史を作つていった時代ですから。

とはいうものの、神は在りますから……（注）現代の無神論者には通じませんが、古代・中世の人は何民族によらず神の存在を怖れをもつて信じていましたから、……神は在りますから、権力（物と力による支配）だけではうまくいきませんので、必ず神威を笠に着ながら治めねばなりませんでした。

ヨーロッパでもローマ帝国では、キリスト教を国教化して皇帝がこれを笠に着たり、やがては皇帝と別にローマ教皇を神の代理人として置きながら、皇帝は、また中世の領主たちも、その後の近

代の領邦国家の王たちも、権力による支配が事なきを得ていました。中国でも易姓革命などと言って、徳ある者が天命を受けて支配する禪讓時代を通り、やがて革命で天から権力による社会支配を委任されたとする、放伐（武力による権力支配の交替）をも是認する巧みな、権威を笠に着た権力支配が続きました。

日本では、西欧や中国とはちよつと違います。何といつても、人民が山や海や木にも精霊（神々）が宿っているというアニミズム信仰が強かったので、この神々の大元である三位一体の神（天之御中主神・高皇産靈神・神皇産靈神）……国産み・神産み・人と万象産みの陰陽二神（伊弉諾尊・伊弉冉尊）……その三貴子の筆頭天照大神の、レッキとした皇孫瓊杵尊につらなる万世一系の天皇を立てておかないと、権力の座がゆるみません。ということ、頼朝以来江戸幕府まで、京都に坐す天皇の権威を犯すことなく、將軍は代々征夷大將軍を天皇から任命された者としての地位を保ち、つまり神なる天皇の笠をやはり被り、権力支配（土地と人民を、武力経済力で支配する）体制をとつてきました。

でも、天皇はあつても後には風のように弱く、直接人民を威圧するまでには至らないので、権力者である將軍は何かの権威を持たねばなりません。ここで培われたのが武士道です。忠孝一本を大元に、いろいろな人倫をからませて、鎌倉から江戸期に至る武家の倫理道德です。これは人民にまで及び、武士道が元になりつつ、日本の精神が誕生しました。

これは人の道。日本人が大元の根源神に連なる天皇に忠誠を尽す工合いに、將軍へ、大名なる主君へ、家の君たる親に、忠誠をつまり忠孝を致さねばならぬというきつい人倫でした。というわけで、

この武士道を元にした日本精神がある限り、日本の武家政権は安泰を得てきたのでした。

随分うまいこといったものです。人はパンだけで生きるものではない。パンの他に、人倫という<sup>おぼえて</sup>掘み<sup>ほ</sup>きたいな、人の精神の首に輪をはめるような日本精神がつくられたので、歴代の将軍はつまり武家政権は安泰だったのです。

しかし、この輪は犬の首輪に非ずして、白鳥の羽とか、天馬、つまりは神そのものの手が、人を天空にまで引き上げるための、仮りの手懸りであったとしたら、ここから歴史がすっかり変わる筈です。

#### 4、明治維新は武士道による勝利でした

黒船の来航は一八五三年（嘉永六年）、それから十五年後には、大政奉還・王政復古（政治権力の座を将軍から、天皇へ移す）大号令が発せられ、一八六八年明治維新。名実ともに権力の座が天皇の権威の座と一つになる大方向が決定されました。この間わずかに十五年。

中国（清）は一八四〇年のアヘン戦争から半植民地化への道を一筋に歩いており、十九世紀後半は全世界が西欧の帝国主義的侵略の波を受け、一九一四年第一次大戦が始まる頃には、実に世界の84パーセントがその植民地、ないしその支配下に入るといふ状況になっています。アジアの孤島日本の厳たる独立は奇跡でした。

この奇跡はひとえに、日本精神の結晶体である武士道による精華だと思われれます。なぜなら、明

治維新を実現させたのは、薩摩や長州など下級武士の活動によるものでした。ある者は勤皇攘夷、または開国を叫び、命を賭けて（多くの者が命を捨てて）実現されたのでした。この滅私奉公（無償で、国のため、君のため、主のために命を捨てて働く）これこそが武士道の本道です。つまり「武士道とは死ぬことと見つけたり」、むなしく命を捨てるのでなく、主君のために、これが明治維新ではお国のために（日本国のために）発現されたわけでした。

それから日本は近代化も急ピッチで進みます。明治二十二年「大日本帝国憲法」の発布。これで日本は民主的な立憲君主国家となります。また殖産興業政策で近代的な工場がつくられ、資本主義経済体制へと入っていきます。また徴兵制も施行され、近代的な国民軍が作られて、富国強兵・近代化。こうして西欧諸国にひけをとらない一流国家への道を歩み続けます。

こんな目覚ましい、東洋の孤島の奇跡は、武士道精神の賜物です。なぜなら、明治以前、政権の座にあったのは武士でした。鎌倉以来七〇〇年間、武家は権力の座に坐っておりました。武士はそのいわば官僚、民衆から見ると特権階級です。この武士が明治維新では、いわゆる近代化・民主化へと革命を実行したわけです。これは西欧と反対です。西欧のフランス革命など民主革命は、平民である市民が特権階級である貴族（政治・軍事・経済の特権階級）を打倒することで実現されたのです。

日本では武士自身が特権の座から下りて、近代化を進めました。これこそが滅私奉公、彼らは国のために、自己を捨てたわけです。滅私と奉公、ここに武士道があります。ただ、単に彼らは自分を捨てたわけではありませんが。国の独立、その中には、天皇家を守る日本の国柄という強い意識

がどこかにあつた筈です。これが勲皇です。これは外国には無い日本独自のものです。

## 5、騎士道と武士道は、異質の別々の道

西欧には騎士道といって、武士道と似た道が中世以来あります。敬神・忠誠・武勇・礼節を尊ぶ<sup>たつと</sup>。これは武士道と瓜二つです。でも、これは全く別々の異質の道です。なぜなら、騎士道は契約関係であり、武士道は愛の道だから。

どういうことかという、中世の騎士道は領主から荘園を貰う時、これと引替えに契約をして封建領主との間に主従の契約を結びます。一つの荘園については、戦争の時、これこれの兵を差し出す。二つの荘園を貰う時は更にこれこれの軍を差し出す。更に、A・B二人の主君を持つことも、A・B・C三人の主君を持つことも可能です。なぜなら、貰う荘園の数に応じて、戦争の時に兵を差し出しさえすればよいのですから。AとBが戦つても、自分の部下を二つに分けて、大きな荘園を貰つた方に自分は参戦すればよいのです。この契約を守ることが忠誠であり、二君に見える<sup>まみ</sup>ことも、三君にまみえることも決して二股武士ではなく、荘園授受の時の契約を誠実に履行するかどうか、これが忠誠のけじめです。だから西欧の騎士道の根底にあるのは、土地、財を産む土地、即ち物質です。言い換えると、騎士道の価値観は食（肉体を支えるもの）、つまり「人はパンで生きるもの」、この人間観の上に成立しているのです。

ところが、日本の武士道は全く異質です。決して二人の主君を持つことは出来ません。それは恥